

ファンタジー小説

ぱっしょん!

～新米(♀)聖職者の

(Hな)受難～

序章 聖職者ユーナ

「ユーナ、本日をもって、当学校の基礎教育を終えた事を証し、卒業とする」

「はいっ！ありがとうございます！」

「今後も励むように」

「はいっ！がんばります！」

「我らが信ずる癒しの神のご加護があらんことを」

（お父さん、お母さん、私は無事に学校を卒業しました。立派な聖職者になったらいったん里帰ります。…でも…まず、最初に何をやったらいいんでしょうか？先生に教えてもらった大きな病院に、仕事があると思ったんですが、…私のような学校を出たばかりの者には雑用すらないと言われました。もっといろんな魔法を使えないとダメなんだそうです。）

ユーナの使える魔法

- ・ヒール（初級）（ごく少量の体力回復）
- ・ディバインライト（杖の先端を光らせる）

第1章 スライム

（魔法のレベルをアップさせるには、魔物退治をしながら実践するのが一番効率がいいって聞いたことがあります。でも…魔物退治なんて私にできるでしょうか……う～ん…一番弱い魔物なら…）

この世界で一番弱い魔物、それはスライムである。この世界の人間にとってスライムは畑の作物を荒らすやっかいな存在だ。農家の者が交替制で見張りをしたり、番犬を使ったりするが、スライムは音もなくやってくるので夜は特に見張りが難しいのだ。

「あ、あの…スライム退治の仕事ってないでしょうか？」

ユーナは職業あっせん所で係員に尋ねた。

「スライム？…あんた聖職者？」相手はジロジロとユーナを見た。

「は、はい！」

「聖職者にスライム退治なんてできるの？」

うら若い女性を馬鹿にしたように鼻で笑いながら言う。

「う…杖で…追い払うくらいなら……たぶん…ですけど」

「ふ～～ん…あることはあるけど、報酬は安いよ」

「それでも構いませんっ！」

「おっけ、じゃあ、ここの農家に行ってみて」と案内係は紙を渡した。

「あ、ありがとうございます！」深々とおじぎをしてユーナは外に出た。

郊外にある農家にやって来ると、ユーナは事情を話した。

「家のすぐ近くの畑はいいんだけどね、森の近くの畑がね…よく荒らされるんだ」

「そうなんですか」

「うん、夜になるとね、森からスライムが出てきてねえ…一応、犬は放しておくんだけどね」

「ええ」

「犬もスライムにやられる時があってねえ」

「え？犬がですか？」

「うん」

（スライムって番犬より強いのでしょうか…私に…できるのでしょうか…うう…）

「一度スライムにやられた犬は、なぜかスライムを見ても吠えなくなるんだ」

「そうなんですか…」

「むしろスライムとじゃれようとするんだねえ…不思議だよまったく…」

（一体どういうことでしょう…？）

「あんた、杖持ってるけど、魔法使い？」

「いえ、聖職者です…まだ見習いみたいなものですが…」

「ふ～～ん、よく分からないけど頼むよ」

「はっ、はいっ！がんばります！…あ、あの…スライムってどんな姿なんですか？」

「は？…あんた、知らないのに退治しようとしてたの？」

農家のおじさんはちょっと驚いたような呆れたような表情で言った。

「は、はい、すみません…名前ぐらいしか聞いたことがなくて…」

さっきは受付で馬鹿にされそうだったので、聞きにくかったのだった。

「大きさはいろいろだけど、だいたいこのぐらいかな」

そういっておじさんは手で大きさを示す。

「意外と小さいんですね…(それなら私にもなんとかなりそうです)」

「そうだね～～、で、形は丸っこくてぶよぶよしてるなあ～」

「だいたい分かりました、ありがとうございますっ！」

こうして彼女は勇んで畑へと向かったのだった。

畑のすぐ近くに番小屋がある。ここに必要のない荷物を置いて夜になるまで待つ。

そのうち日も十分に暮れた。いくらか月明かりがあるが、だいぶ暗い。畑に出たユーナはディバインライトを使い、杖の先端に明かりをともし、この世界では電灯は発明されていない。ユーナのような魔法を使える者以外は、ロウソクや松明(たいまつ)やランプを灯火として使う。

畑を見回っていると、何かが動いたような気がした。杖の先端をそちらへ向ける。何かが輝いて見える。

(なにか綺麗なものが…何でしょうか…)

スライムにも様々な種類と色があるが、透明に近いものは光をいくぶん反射し、夜は光を当てると輝いて見える。ユーナはそれがスライムだとは知らずに近づいていく。

(わあ、きれい…)

しゃがみこんで足元の物体に手を触れた。ぶよぶよとした感触が伝わってくる。

(あっ、もしかしてこれが…)

と、気付いた時には、すでにスライムはユーナの脚にからみついて来た。

「(ど、どうしよう…)…え、えいっ！」

立ち上がって杖で軽く叩くが、スライムはびくともせず彼女の脚をゆっくりと這い上がってくる。何度も同じように杖で叩いたり、手で引きはがそうとするが、一向に効果がない。スライムはスカートの中へと潜り込むと、まるでナメクジが通ったあとのように、ねっとりとした粘液を出しながらストッキングの上を這い上がる。そのうち、ストッキングの上端を越え、ユーナの素肌の内ももに触れた。ゾクゾクとした悪寒が走ると同時に土の凸凹に足をとられバランスを崩し、尻もちを付いてしまった。

「きゃっ」

スライムはさらに這い上がり、ユーナの股間へと達した。

（あっ、だっ、だめっ、そんなところっ…）

まるでマッサージでもするかのように、スライムの体が波打ち、ユーナの陰部をさすったり揉んだりするような動きで刺激する。

「いやああっ！だめえっ！」

ユーナは急いでスカートをまくり上げ、スライムの一部を手でつかんで引きはがそうとするが、スライムの体はスリリと手から抜けていってしまう。やがて、スライムはショーツの中へ入って来た。ぬめぬめとした粘液を放出しながら、ユーナの股間を愛撫し続ける。

「（うう…気持ち悪い…いったいどうしたら…）…ああんっ！」

ユーナが急に声を上げたのはスライムが彼女の陰核を吸い始めたからだ。汚れを知らないユーナは、他人にはもちろん触られたことがなく、自分でさえ体を洗う時以外は陰部に触れるようなことはしない。まして陰核をいじるような真似は、自慰行為を固く禁じられた聖職者に許されるはずがない。

「（いったい…なんで…声が勝手に…）…んんんっ！」

齒を食いしばって声を出さないように努めるユーナ。だが、こんなにも衝撃的な、初めての体験に体が反応しないはずがない。

「んああああっ！だめえええっ！」

ビクビクと体を震わせ、絶頂に達してしまった。ユーナにとって、「イク」という感覚は生まれて初めてである。

（今のはいったい…？あああっ、また…）

休む間もなく、スライムの愛撫は続く。そして、気が付けばいつの間にか、もう2匹ものスライムが音もなく背後からユーナの体に迫り、まとわりついて来た。その2匹のスライムはユーナのガウンの裾から中に潜りこみ、腹側に移動すると、ブラウスのボタンとボタンの間から中へ、ずりりと入り込んだ。

（だっ、だめっ！）

2匹はヌルリヌルリと上半身を這い上がり、ブラジャーの中へも入り込むと、股間のスライムと同様に、波打つように動き、彼女の小ぶりの乳房を揉みだした。

「くっ…！」

ユーナは目をつぶり必死に耐える。が、陰核を吸われながら、同時に2つの可愛い乳首をきゅ

ううっ、と吸われた時には、

「ああああっ、んんんっ！んああんっ！」

と、またしても喘ぎ声を出してしまった。そして、何度も何度も強制的にイカされてしまったのだった。処女の彼女にとって、なんという過酷な体験だろうか。

第2章 ギルド

次の日、ユーナはベッドの上で目を覚ました。

（あれ？ここはいったい…？）

こじんまりとした部屋の中だ。昨日の記憶をたぐり寄せてみる。

（あっ！…私、スライム退治に行って…）

彼女は体を起こした。だるい。そして、体の一部にズキズキとしたしびれを感じる。ゆうべ、スライムに吸われた胸と股間だ。ひょっとして傷になっているんじゃないだろうか。気になって胸を見してみる。乳首の周りが赤くなっており、少し腫れているようだ。股間を見る勇氣はない。おそらく胸と同じように赤く腫れているのだろう。

ベッドのそばのテーブルの上には聖職者の服一式が丁寧にたたんで置いてある。その隣に書き置きとともに小瓶が置いてある。「体力回復剤よ、飲んでね」と書いてあった。女性が書いたのだろうか。そして、杖もすぐそばに立てかけてある。

聖職者は緊急時以外、自分に魔法をかけてはいけないことになっている。聖職者の魔法や術はあくまでも人を癒すためのものであって、自分のことは二の次だから、という理由である。

回復剤を飲み、身支度を整えると部屋を出た。階段の下からはにぎやかな声が聞こえてくる。ちょうど昼飯時だ。階段を下りていくと、入り口近くのテーブルにいた男女がこちらに気付き、声をかけてきた。

「やあ、大丈夫かい？」

「は、はい…」

「俺はデイヴィッド、まあ掛けて」

「あ、ありがとうございます」

椅子をすすめられ、腰かけるユーナ。

「私はフランシーヌよ、みんなはフランと呼ぶわ、ふふっ」

「あ、私はユーナです」

「ユーナちゃん、体の具合はどう？」フランが優しい声で訊く。

「あ、はい、だいぶいいです」

「それなら良かったわ」

「うん、良かった…昨日の夜、俺たちは仕事の帰りに、たまたまあの近くを通りかかったんだ。何かが光ってたから近寄ったら、君の杖が光ってて、君を見つけたんだよ」

「それで私がスライムを退治したわ。農家のおじさんにも話をしておいたから大丈夫よ」

「そうだったんですか…ありがとうございました…本当にご迷惑をおかけしました」ユーナは申し訳なさそうな顔をして深々と頭を下げた。

スライム退治の基本、物理的には鋭利な刃物を使い、切るか突くかすれば、たいていは容易に退治できる。または魔法を使う方法もある。肌に張り付いたスライムを無理に引きはがそうとすれば、自分の肌もはがれ傷つける可能性が高いため、やってはいけない。

「ところで、君はどこに住んでいるんだい？」

「私、まだ住む場所が決まってないんです」

「ふ〜ん、そっか…ねえ、せっかくだから、うちのギルドに入らない？」

「ギルド？」

ギルドというのは簡単に言えば、メンバー同士が助け合って活動するグループのことだ。活動内容はギルドによって異なるが、一緒に狩りに行ったり、トレジャーハント（宝探し）に行くのが一般的だ。

また、様々な仕事をギルドとして請け負うことがあり、メンバーたちへ仕事を割り振る。

「特に最初の内は一人で魔物退治なんて無理だよ」

「そうなんですか…わ、わかりました。私なんかで良ければお世話になります！」

「じゃあ、決まりだねっ」

「よろしくね」

「はいっ！ よろしくお願いします！」

こうしてユーナはギルドの一員となった。その後、簡単にギルドの活動やこの建物についての説明を受けた。この建物は宿屋だ。1階には受付、食堂、風呂、トイレ、炊事場があり、2階以上が滞在客と一般の宿泊客の部屋となる。風呂、トイレは共同であり、風呂は滞在者だけでなく、外から

来る一般客も使える。一般客は有料であるが、滞在者は無料である。そして、滞在者は掃除の時間帯を除いて、いつでも好きな時に入ることができる。食堂はその都度お金を払えば、朝昼晩と食事にありつける。食堂も風呂と同様に滞在者以外の一般客も利用できる。炊事場は長期滞在者が自炊できるようにするためにある。

「もしお金がなければ、当面の滞在費はギルドで立て替えておくけど…」

「あ、いえ、ひと月ぶんくらいの生活費は、聖職者の団体から頂いていますので大丈夫です」

「そっか、じゃあ安心だね」

「そうね」フランはホッとしたような顔をしてユーナを見た。

「ところで、ユーナ、腹減ってない？」

「いいえ、今はあまり…」

「そっか、じゃあ、機会があったら今度一緒に」

「今日はゆっくり休んでね、明日にでもまた…」

「はい、ありがとうございます！」

デイヴィッドとフランが席を立つと、ユーナも立ち上がり、いったん部屋に戻った。今日からここが彼女の生活の場だ。部屋は狭いが、窓は東にあるため、毎日朝日が差し込んでくるだろう。早起きなユーナにはぴったりだ。

さっきはフラン達の前で、体調はだいぶいいと言ったが、急に眠気が襲ってきたためもう一度寝直し、目が覚めたのは夕方4時近くであった(この世界の時計は全てゼンマイ式である)。体はだいぶ回復した。腹も減ってきた。昨日の午後から何も食べていなかったのだった。食堂へ行くと、人はまばらだった。この時間は給仕がないようで、セルフサービスと書いてある。カウンターで軽い食事を注文し受け取ると、窓際のテーブルへ着いた。夕日が差し込む席で、外の往来を眺めながら食事を済ませ、また自分の部屋へと戻った。

(今日はこれから何をしたらいいでしょう…う～ん)

ユーナはトランクから薬草の本と植物図鑑を取り出して読み始めた。これらの本は学校の先生から譲り受けたものだった。聖職者の中には薬草から薬を作る者もいる。ユーナは魔法だけでなく、薬によっても人を癒したいと考えていたのだった。元々植物に興味があった彼女は夢中で読み始め、すっかり時間が過ぎてしまった。気が付けばもう夜の9時をまわっていた。

(そういえば、ここのお風呂は大きいって聞きました…しかも温泉ですって…ふふっ、ちょっと楽しみです)

第3章 風呂で女子トーク？

滞在客は掃除の時間帯以外は、時間に関係なくいつでも無料で入ることができる。

ユーナはタオルとセッケンと着替えの下着を持って階段を下りた。食堂からは賑やかな声が聞こえてくる。脱衣所には誰もいなかった。一般客は10時までしか使えないため、空き始める時間だ。服を脱いで浴室に入ると、ちょうど出てくるグレーの髪の女性とすれ違った。ユーナはチラリと見たが、向こうは彼女を気にもとめない。そして、浴室には数人の客がいるようだ。

脱衣所や浴室の中ではたくさんの口ウソクが火をともしながら並べられている。洗い場の壁にはたくさんの樋(とい)が突き出ており、お湯の樋と水の樋が交互に並んでいる。ここから温泉のお湯と水が四六時中流れ出ている。水は湧き水をひいている。

ユーナは洗い場の小さい椅子に座り、樋から出てくるお湯と水を確認めた。

(なるほど…これでお湯と水を混ぜて熱さを加減するんですね)

まずは洗面器にお湯をため、その後水を入れてちょうど良い湯加減にする。そして、肩からゆっくりとお湯をかける。

(ふう…いいお湯です…)

ユーナにとって、風呂はいつもリラックスできるひと時だ。

いつもやっているように、タオルにセッケンをつけてよく泡立てた後、優しく体を洗い始める。まずは腕から肩にかけて、そして脇の下と首…次は脚の先から付け根にかけて…。ユーナのしなやかな体の動きからは、彼女の育ちの良さがうかがい知れる。次に、胸を優しく撫でたとたん、ヒリッとした感覚が襲ってきた。

(えっ？…今のは…?)

もう一度胸を軽くタオルでこすってみる。

(きゃっ)

やはり、ヒリッとした感覚が襲ってきた。どうやら乳首がひりひりするようだ。ゆうべスライムに襲われた時の名残だろうか。そう思ってこれ以上は刺激しないようにした。今度は胸から腹、そして、股にかけて優しく洗う。が、今度は股間がひりりとし、一瞬体がびくっとしてしまい、いやが上にもゆうべの事を思い出してしまった。もうこれ以上胸と股は洗うのをやめ、背中を洗った。

こんこんと流れてくるお湯と水を洗面器に貯め、ざあっと体に向け、セッケンの泡を流す。もう

一度…が、今度は水の量が足りず、やや熱いお湯がかかった胸がまたしてもひりひりとしてきた。
(もおっ…いったいなんなのでしょう…)

改めて自分の胸を見てみると、乳首がツツンとなっているのが分かった。初めてこんな自分の乳首を見たユーナは恥ずかしくなってしまった。

できるだけ気にしないようにし、体を洗い終え、湯につかった。

「あら、ユーナちゃん」

先に入っていたフランが声をかけてきた。

「あ、こんばんは、フランさん」

ユーナはにっこりとほほ笑んだ。

「ここのお湯はね、健康にも美容にもいいのよお、ふいふっ」

「そうなんですかつ、それは素敵ですねっ！」

ユーナは朗らかに答える。

大昔、千年以上も前、ある偉大な魔法使いが人々のために岩盤を魔法で砕き、温泉を掘り当てたという話を、フランはユーナに話して聞かせた。

話している最中に体格のいいショートヘアの女性が入って来た。体を洗い始めた彼女の背中をユーナがちらりと見ると、大小の傷がいくつもある。彼女は体と髪を洗った後、湯船につかり、ユーナたちの方へ寄って来た。

「やあ、フラン」

「こんばんは、ジャンヌ」

「こんばんは、初めまして」

「ん？」女性はユーナを見た。

「このコはユーナちゃん、新しいメンバーよ、聖職者ですって」

「ほお！ よろしく、ユーナ、あたしはジャンヌ」

「よろしくお願いします、ジャンヌさん」

「さっき食堂でギルマスが話してたコだね」

「デイヴィーがなんて？」

フランはいつもデイヴィッドのことをデイヴィーと愛称で呼ぶ。

「魔物に襲われたコを助けてギルドに誘った、ってね」

「ふ〜ん…」

ユーナはうつむいてしまった。またゆうべのことを思い出してしまったからだ。

「ところで、ユーナ、何に襲われたんだい？」

「えっと…ス…スライムです…」

「そっか、あたしがいたらスライムなんか切り刻んでやったのに」

「ジャンヌはね、剣士なのよ」

「そうなんですか、強いんですねっ！」感心してジャンヌの顔を見る。田舎育ちのユーナは女性剣士というのを見たことがない。

「まあね、へへっ」

「あら、否定しないのね、ふふっ」

「へへっ…それにしても、あんなのをペットにして飼うって奴の気が知れないよ」

「ええっ！スライムをペットに、ですか！？」

「うん、信じられないだろ？あんな醜いやつをさ」

「…そんなことできるんですか？」

「法律で禁じられているけどね、隠れて飼うやつもいるのさ」

スライムにあんなことをされたユーナには、まったくもって信じられないことだ。

「ところで、ユーナ…スライムにやらしい事されなかったかい？」

「え…そ、それは…」

ユーナは恥ずかしさのあまり、またうつむいてしまった。

「はあ～、されたのか…」

「…」

「ま、気にするなよ、スライムなんてまだかわいいもんさ」

そう言われても、ユーナにとっては刺激が強すぎるショックな経験だ。それに加えて、スライムに襲われた時の格好を見られたのかと思うと…。

「あのね、ユーナちゃん…」

「は、はいっ」

「あなたに吸い付いていたスライムはね、私があなたの服を脱がせて退治したから、ね」

「え？あ、はい…」

「だから、デイヴィーには見られてないわよ、安心して、彼はあなたを見つけた後、ちょっと離れて背中を向けて、全て私に任せてたから…」

「そうでしたか…ありがとうございます」

ユーナは少しだけ安心した。

スライムの生態はよく分かっていない。一応魔物に分類されているが、本来スライムは作物を荒らすくらいがせいぜいで、自ら人間に危害を加えるようなことはない。もちろん、自分の身を守るために反撃してくることはある。しかし、それも反撃ではなく、相手にすり寄ってくるだけ、と考える学者もいる。犬が人間にしっぽを振ってすり寄ってくるように、だ。ただ、スライムは声を発しないし、しっぽも持っていない。相手に何かを伝えるための手段を持たない。つまり、身の危険を感じたスライムが、自分は敵ではないよ、とすり寄ってきて、拳句、ボディータッチで仲良くしようとしてくる、足の遅いスライムは、逃げるよりも、いちかばちか、相手にすり寄るほうが安全だと本能的に知っている、という説だ。

実際、ユーナがされたような事はスライムの習性として、世間に広く知られている。

諸説あるが、有力な説の一つでは、スライムはあんなふうにして相手の体液を吸い取り、自分の栄養としている、とも考えられている。もう一つは先程述べたように、相手にすり寄り、自分は敵ではなく、それどころか、相手に快樂を与えらる存在であることを知らしめるため、とする説。

実際、隠れてスライムを飼う者の多くは、スライムを自慰行為の道具として飼っているという噂もある。それがために、本当は魔物の支配者がスライムを人間社会に送り込み、人間を墮落させようとしている、などという者もいる。だが、そもそも魔物の支配者などいるのかどうか誰も知らない。ちなみにただの観賞用として飼うのは少数派だと言われている。

「まだスライムで良かったよ、もし相手がゴブリンならもっと大変さ」

「え？ごぶりん？…ですか？」

「ああ、…知らないかい？」

「はい、よくわかりません」

「ゴブリンのザコはすばしくくて小さいくせに、性欲だけは人一倍でね…」

ジャンヌは顔をしかめながら言った。

「ジャンヌ、ユーナは聖職者なのよ、そういう話は…ちょっと」

困ったようにフランが言う。

「おっと、ごめん、そうだったね……聖職者か～～、珍しいね」

「でしょ？うちのギルドで二人目ね」

「なんで聖職者になったんだい？」

「えっと…私…父が医者で、母が看護師なんです。もっと小さい頃は、将来は父の跡を継いで医者になりたかったんですが…勉強が苦手で…読み書きは好きなんですけど、算数が苦手で…」

「ふ～～ん…あたしも勉強は苦手だったよ、あははっ！」

ユーナとフランはくすつと笑った。

「それで…初等を終えた後、うちの手伝いをしながら、ずっと考えてたんです、将来どうしようって……それで…ある時、遠い親戚のおばさんを思い出したんです…その人は聖職者で、多くの人々を助けているって聞いてたんです……私、両親のように、人のために働きたい、って思っていたんですけど…勉強は苦手でも、聖職者になれば、人の役に立てる、って思ったんです……それで、15歳で聖職者を養成する学校に入ったんです」

「へ～～、そうだったのか～～」ジャンヌは感心したようだ。

「それで、最近学校を卒業したのね？」フランが聞く。

「はい、そうです」ユーナは微笑んだ。

初等科学校では、読み、書き、計算、歴史、地理、自然などのごく基本的なことを習う。これは12歳までで、これがこの国の、いや、大部分の国の義務教育制度となっている。

さらに学問をしたい場合は中等科学校に通い、一般的に15歳で卒業する。さらに学問を深めたい者、例えば将来、法律家、政治家、医者、学者などを目指す者は、20歳くらいまで高等科学校に通う。能力があれば飛び級で進級できるのが普通だが、習得が遅ければ卒業はその分遅れることになる。

その他の教育機関としては剣士、魔法使い、聖職者、職人などの養成所がある。年齢制限などは特にないため、義務教育を終えた後に通う者もいれば、中等科学校を卒業した後に通う者などもおり、さまざまである。

ユーナは一人娘だったため、父親はユーナに後を継いでほしいと思っていたが、本人も言うように算数が苦手だったため、田舎の中等科学校の試験に合格できず、入学はかなわなかった。

「ふ～～ん…ま、あたしなんか脳筋だからね」

「え？のうきん？って何ですか？」

「脳が筋肉でできている、ってことね」フランがにっこりとほほ笑んで説明する。

「脳が筋肉で……？」

ユーナはちょっと考えていたが、ようやく意味が分かったらしく、ぷつと吹き出して、くすくす

と笑った。

「はははっ！」ジャンヌはいつも大きな声で笑う。

「ふふっ」とフランは微笑しながら笑う。

「ところでさ、フラン、あんたまた大きくなったんじゃない？」

ジャンヌはフランの胸を見て言った。

「ふふっ、そうね…」

「一体何を食えばそんなに大きくなるのさ」

「さあねえ…たぶん遺伝だと思うわ」

「いでん？なんだいそれ、うまいのかい？」ジャンヌは真顔で聞く。

「遺伝というのは、親や祖父母、先祖から性質を受け継ぐってことよ」

「へえ～～」

「私は母も祖母も胸が大きかったらね、ふふっ」とフランが笑う。

「ふ～～ん、そういうものかねえ」

ユーナは自分の母親を思い出した。彼女はユーナのように小柄で華奢(きゃしゃ)だったが、胸だけは豊かであった。

(あれ…？私はお母さんに似なかったのかしら…あ、でも…)

子供の頃、よく母親に似ていると周りの人たちから言われた記憶がある。

(う～～ん…よく分からないです…)

「でもあなたも立派なものよ」とフランがジャンヌを見て言った。

「あたしのは大部分筋肉だからね、ははっ！」

ユーナはチラリと2人の胸元を見た。自分とはまるでタイプが違う。学生時代にも胸の大きい同級生はいたが、フランほどではなかったし、まして、ジャンヌのような筋肉質なタイプもいなかった。

「そういえば、あんた時々、夜になっても帰ってこないけど、男でもいるのかい？」

「さあ、どうかしらね？ふふっ、想像にお任せするわ」

「はぐらかすなよー」

「さて、私はもう上がるわ、じゃあ二人ともまたね」

そう言ってフランは立ち上がり、浴室を出て行った。フランの裸体が目に入ると、ユーナは恥ずかしそうに目を伏せた。豊満な胸、にもかかわらずくびれたウェスト、肉付きのいい尻…そして、大人の女性の色気が漂っていた。

「フ란のやつ、あやしいなあ……まあ、何かあったらさ、あたし達に遠慮なく言ってくれよ、力になるからさ」

ジャンヌはニカッと笑う。

「は、はいっ、ありがとうございますっ！」

聖職者学校には、ユーナのような志の高い若者だけが来るわけではない。むしろ彼女のような若者は少数派である。多くは親が家業の寺院を継がせるために、せめて聖職者の真似事をしに来い、ということで入学させられてくる。そんな若者たちはユーナとはソリが合わないと感じるらしく、自然に彼女とは距離を置くようになった。学校の寄宿舎には共同の風呂があったが、こんなふうに風呂に入りながら楽しく会話したことなど一度もなかった。今日ユーナは久しぶりに楽しいひと時を過ごしたのであった。